

国

語

(
解答
番号
)

1

5

37

(

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で表記を一部改めている。(配点 45)

幼少の頃のわたしは、いつも途方にくれていたように思う。かつて小学校三年生まで住んでいた小さな借家は、古びたアパートから比較的裕福な邸宅まで大小の家々が(ア)カタを寄せ合う路地奥にあった。家庭環境も様々な、異年齢の子どもたちが鬼ごっこをして遊ぶような、どこか懐かしい光景がまだまだ残る住宅街だった。そこには幼いながらに社会があり、見えない約束事があった。

わたしはいつもぼうつとしていて、彼らが今何をしているのか、何について笑っているのかわからなくなることがたびたびあった。なんとなく後をついていき、いつのまにか置いていかれたり、よくわからないことで怒られたりした。世界はいつも薄い膜の向こうにあった。目の前で起きている事柄には実感が伴わず、自分という存在すら不確かだった。自分の名前や姿かたち、置かれている状況を反芻(はんそう)していると、ふと、まるでよく知らない他人を眺めているかのような感覚にしばしば囚(とら)われた。わたしには「ふつうのこと」の基準がよくわからず、見えないそれらの約束事から逸脱しないように、友人の顔を気弱(うかが)に窺(うかが)っていた。

人とのコミュニケーションに苦手意識を持っていたわたしは、何とということのないありふれた景色の一部にふいに目が留まり、それを眺めている時間が好きだった。何故かどうしても気になってしまうそれらは、いわゆる「美しいもの」では必ずしもなく、むしろみすばらしかったり薄汚れたりもしていた。しかし目に留まった瞬間に、それらはわたしにとってある種の「美しさ」を備えたものとして立ち現れてくる。

高い空、陽(ひ)を(イ)スカしてざわめく葉のきらめき、アスファルトに練り込まれた無数の鉋物の模様、(ウ)トリヨウのはげたガードレールや、アパートの古びた鉄階段の錆びた様子、雨で浸食されたブロック塀のざらざらとした質感、その隙間に育つ雑草、誰かの日常が閉じ込められた家並みに、雑然と並んだ植木鉢、ベランダの洗濯物、空き地にぼうぼうと伸びる草むら、打ち捨てられた粗大ごみ……。心惹(ひ)かれた対象が樹木や草花であっても、それらの名前や種類には不思議なほどに興味がなかった。世界

が意味あるものとしての輪郭を失い、言葉で把握不可能なものとなり、「ただそのようなものとしてそこにある」ものとして感じられることが、わたしには重要だった。

目に映るものひとつひとつは、わたしには理解しきれない「他者」として存在していた。そして世界はさらに、具体的な場所や時間を超えて、出会ったことのない「他者」の物語を無数に含みこんだものへと変貌していく。A それは日々のコミュニケーション・シヨンの中で感じる他者のわからなさとは異なり、不思議な心地よさを味わわせてくれるものだった。

幼少の頃のこうした体験の記憶は、おそらくわたしという生のコン(エ)カンに関わるものとしてある。そしてわたしにとって作品を制作するという行為は、その過程でこうした感覚を何度も何度も追体験することなのだろう。それは制作過程において、モチーフとの交流、素材との交流、そして作られた作品との交流の中で、二重、三重に生起する。

絵のモチーフを探すとき、わたしは幼少のときと同じように、見慣れたものが見知らぬものへと変貌する感覚を、あるいはわけもわからずに心惹かれてしまう対象を求めて、街を彷徨う。そのとき重要なのは「描きたい絵」のイメージに沿ったモチーフを探すことではない。たとえそのような思惑があったとしても、そこから逸脱して目の前で偶然的に繰り広げられる光景に身を投じ、眺める時間そのものを味わいたいと思う。

しかしそうであれば、すなわち何ものにも変換不可能なものとして世界を眺めることこそが何にもまして重要なのであれば、それをわざわざ再現して作品にする行為は蛇足であるだろう。作品化という行為は、本来的に固定化不可能な対象の在り様(あ)を作者の私的なイメージによって歪(ゆが)めてしまうことかもしれない。それでもわたしが——ひいては芸術家と呼ばれる人々、あるいはそうでない人々が——造形物を作るのは、それがモチーフの縮減された再現や、作者の内的イメージの具現化であることを超えて、作者にもわかりえない新たな何ものかとして生み出されていくからにはかならないだろう。

(注1) ポスト構造主義に多大な影響を与えた思想家のG・バタイユは、(注2)ラスコーの壁画を描いた先史時代の人々にとって、洞窟に描線を描く行為は支持体(素材)を変質させる「魔術的な操作」であり、錯綜(さくそう)する線の中から生成する形象の出現に立ち会う出来事であったと推察している。線の中から出現しつつある形象は不変の同一性としての事物ではなく、一種の主体のように「聖なるも

の「として自ら現れる。そのとき見る主体と見られる対象との超越的な関係は崩れ去り、不変の同一性としての自己の存在もまた揺るがされるといふ。

バタイユが指摘するように、**B** 造形行為には目の前で変貌していく素材との交流という側面がある。作品は「素材」によって物質としての形を与えられる。個々の素材は、それ自体がつかることのない魅力をはらんだ「もの」である。制作の過程で素材と戯れ、その形や色を変質させていく行為は、その結果として出現する思いもよらない素材の姿を受動的に味わう時間をもたらす。

素材の中に突如現れる、予測不可能な「美しさ」に目が留まる無数の瞬間は、わたしが風景などを見ているときに味わう、あの体験にとても似通っている。わたしは子どもの頃に見慣れた景色を眺めたように、自分の作品へと眼差しまなざしを向ける。制作途中で出現した美しさは上から重ねられていく仕事によって失われ、自分しか知りえない時間の痕跡として、作品の中に折り込まれていく。作品はわたしの手からはみ出し、いつも見知らぬものとしてわたしの目の前に現れる。たとえそれが「完成」したとしても。

C 冒頭からこれまでの記述は幼少期の私的な記憶の追想と、現在の制作についての（バタイユの影響を多分に含んだ）個人的な解釈にすぎない。にもかかわらず、こうした感覚がけてわたし一人だけのものではなく、多くの人々にとって——日常の中で突如出会う美的体験から、子どもたちによるプリミティブ（注4）な造形行為、アーティストと呼ばれる人々による専門的な作品制作に至るまで——あらゆる芸術的体験の根源に関わるものではないかと、わたしには強く感じられるのである。

わたしが幼少の頃に体験し、現在も幾度となく繰り返しているあの感覚、何かを「美しい」と感じたその瞬間に言語的意味が剝奪され、わかりえないものへと変容していく感覚は、それゆえに他者と完全に共有することが不可能なものである。しかし、それはわたしの個人的体験に留まらず、おそらく「美」あるいは「芸術」というものの本質に関わる事柄である。

ある社会において、「美しい」と言われるものがある。輝く宝石や色とりどりの花束、雲をあか紅く染める夕焼け空、（注5）モネの描いた睡蓮すいれんや光琳こうりんの屏風びょうぶなどを見て、多くの人は「美しい」という感想を持つだろう。ある人にとって「美しい」ものは、おそらく他の

人々にとつても概ね「美しい」。そのとき「美しいものは、何らかの客観的で社会的な価値を有すると信じられている。

その一方で「美しいものは、それを「美しい」と判断する主体の主観的で個人的な価値にも強く支えられている。ゆえにわたしたちは、他の誰も目を留めないものに「美しさ」を見出すこともあれば、人が絶賛する著名な美術作品にどうしても「美しさ」を見いだせないということもある。同じものを「美しい」と思っても、なぜ・どのようにそれを「美しい」と感じるのかは人によって異なる。その理由を他者に説明し尽くすことはおそらく不可能であり、自分自身でさえそのすべてを把握することは困難であるだろう。「美」や「芸術」は、言語的に理解不可能な「わかりえなさ」を必然的に内包している。

人間は社会的な存在であり、大小の共同体の中で他者と言葉を交わし、商品や労働と対価を交換しながら生きていく。そこでは様々なものが容易に「交換」可能であると信じられている。コミュニケーションにおける言語的交換や経済的な等価交換は、共通の言語や貨幣価値など、価値(オ)「シャクトド」や概念的枠組(ウ)が他者と共有されていることを前提に成立している。科学的・論理的思考は、対象を分析的に把握・理解し、言語化することによって第三者と交換可能な概念へと分節化することを志向する。

しかし「美しいもの」や「わかりえないもの」は、他者と等価に交換可能な余剰を多分に含んでおり、その価値を完全に量ることも、言語によって正確に分節化することも不可能である。「美しいものは「わかりえなさ」をほらみ、「わかりえないもの」はその「わかりえなさ」ゆえに「美しいもの」へと転じうる。わたしたちが日々対峙(タ)している世界——言語的に把握し、価値を客観的に推量できると信じられている世界——のただ中から「美しさ」が出現し、「わかりえないもの」が立ち上がる瞬間、世界はその本来的な「交換不可能性」を露(カ)わにする。D そのとき、暗黙の約束事を共有し、コミュニケーション可能な対象と信じられている他者の外側に、絶対的に「わかりえない」余白としての「他者」の存在が了解される。固定化された自己と世界の枠組(ク)みは根底から揺るがされ、変容を余儀なくされる。

「美しいもの」、そして「芸術」的な体験を通じて露(カ)わになる「交換不可能なもの」の存在。それは固定化された「交換」の枠組(ク)みを見出し、一方的な「贈与」の次元にあるものである。幼い頃から現在に至るまで、日常のふとした瞬間に、そして作品の制作過程の折々に、わたしをふいに襲ってきた、あの感覚。振り返ってみれば、それは何ものにも代えがたい、「贈与」された時

間だったのだろう。

造形活動は、「わかりえないもの」の生成と消滅に繰り返し立ち会う行為である。さらに「**E**」作品を制作するということは、「わかりえないもの」の出現に受動的に巻き込まれるばかりでなく、自ら能動的に「わかりえないもの」を生み出し、他者へと「贈与」することである。わたしは「わかりえないもの」の中に「美しさ」を受け取り、「作品」という形でまた別の「美しい何か」へと変換し、新たな「わかりえないもの」を一方的に贈り出す。誰とも交換不可能で、受け取られる保証もないものを。それでもその「わかりえない美しさ」がいつか誰かに受け取られ、その誰かの世界を揺るがすものとなることを、微かに期待しながら。

(櫻井あすみ『贈与』としての美術・ABR』による)

(注) 1 ポスト構造主義——一九六〇年代後半から一九七〇年代にかけて台頭した思想運動。

2 G・バタイユ——ジオルジュ・バタイユ(一八九七—一九六二)。フランスの思想家。

3 ラスコの壁画——フランス南西部のラスコーにある洞窟に描かれた動物などの壁画。

4 プリミティブ——素朴なさま。原始的なさま。

5 モネ——クロード・モネ(一八四〇—一九二六)。フランスの画家。

6 光琳——尾形光琳(一六五八—一七一六)。江戸時代の画家。

問1

傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1
5

(ア)

1 カタ

④ ③ ② ①

- ① ケンキヤクを誇る
- ② 徒手クウケンで海外に行く
- ③ ケンジツな商売を始める
- ④ 英語力で彼にヒケンする者はいない

(イ)

2 スかして

④ ③ ② ①

- ① 美しい音楽にトウスイする
- ② 犯人のトウボウを防ぐ
- ③ アイトウの意を表する
- ④ 民主主義がシントウする

(ウ)

3 トリヨウ

④ ③ ② ①

- ① 葉を傷口にトフする
- ② 胸のうちをトロする
- ③ ゼント有望な若者
- ④ 南蛮トライの品

(エ)

4 コンカン

④ ③ ② ①

- ① カンデンチを購入する
- ② キカン産業に投資する
- ③ カンヨウクを覚える
- ④ 山をカンツウするトンネル

(オ)

5 シャクド

④ ③ ② ①

- ① 無断でシャクヨウする
- ② 五万分の一のシユクシャク
- ③ シャクメイを求められる
- ④ 方角をジシャクで調べる

問2

傍線部A「それは日々のコミュニケーションの中で感じる他者のわからなさとは異なり、不思議な心地よさを味わわせてくれるものだった。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

6

- ① 「友人の顔色」を気にしながら過ごしていた「わたし」が、他者の基準とは異なる「わたし」自身の感覚で風景のみずほらしさに「美しさ」を求め、それを素直に感じられることに言い知れない心地よさを覚えていたということ。
- ② 現実の世界が「薄い膜の向こう」にあるかのように感じていたかつての「わたし」が、生活のなかで興味を抱く対象に出会うことを通して、自分自身に対する理解を深めていくことに言い知れない心地よさを覚えていたということ。
- ③ 他者との「見えない約束事」が存在する社会にうまくなじめない「わたし」が、日常の景色を眺めるなかでわからないもの思いがけず出会い、意味や言葉で捉えきれないことに言い知れない心地よさを覚えていたということ。
- ④ いわゆる「ふつうのこと」の基準に幼少期から疑問を抱きつづけてきた「わたし」が、他者の求めるルールや基準を放棄し、世界や自己の感覚を曖昧なままに受け入れていくことに言い知れない心地よさを覚えていたということ。

問3 傍線部B「造形行為には目の前で変貌していく素材との交流という側面がある」とあるが、それはどういうことか。その説

明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 造形行為においては、素材を用いて作者が持つイメージを再現していく過程で、素材が作者の内的イメージを補強することから、それにともない作品の完成の形が方向づけられていく側面があるということ。
- ② 造形行為においては、作者が素材を変質させていく過程で、作者の意図していなかった素材の姿との遭遇とそれを加工する行為とを反復し、そのなかで作者のあり方も変わっていく側面があるということ。
- ③ 造形行為においては、作者が素材を作品化する行為を絶えず繰り返し繰り返していく過程で、素材に潜在するわかりえないものを生成したときに、素材の「聖なるもの」としての姿を引き出す側面があるということ。
- ④ 造形行為においては、形の定まらない素材に作者が色や形を重ねていく過程で、素材の在り様に合わせて制作方法を熟考し検討し直すことで、見る主体と対象との関係が逆転していく側面があるということ。

問 4

傍線部C「冒頭からこれまでの記述は幼少期の私的な記憶の追想と、現在の制作についての(バタイユの影響を多分に含んだ)個人的な解釈にすぎない。」とあるが、筆者はなぜこのように述べるのか。その説明として最も適当なものを、次の

①、④のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 言語では把握不可能な幼少期の体験の記憶を、素材の変容を味わう制作過程でのこれまでの体験と比較し相対化することで、他者と共有できないこれら複数の感覚を芸術的体験の多様性に関わるものとして強調しようとしているため。
- ② 見慣れた景色がわかりえないものに変容するという幼少期の記憶を、制作に向かう「わたし」の体験と重ね、それが芸術の根源にもつながる問題であると述べることで、私的な体験を一般に通じるものとして提起しようとしているため。
- ③ 他者と共有できない「美しさ」の存在を、幼少期の体験や作品制作に関わる個人的な事例を具体的に示すことで、芸術の根源にも通じる抽象的で他者と共有困難な美的概念について誰にでもわかるものとして提示しようとしているため。
- ④ 幼少期の美しい風景との出会いが、現在の制作過程においても繰り返し起きていることを述べながらも、これらの体験が個人的な解釈にすぎないと自覚することで、芸術を主観的な価値を持つものとして説明しようとしているため。

問5

傍線部D「そのとき、暗黙の約束事を共有し、コミュニケーション可能な対象と信じられている他者の外側に、絶対的に『わかりえない』余白としての『他者』の存在が了解される。」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 生活のなかで思いもよらない「美しさ」に直面すると、概念的枠組や価値基準を共有してコミュニケーションをとっている相手のほかに、わかりあえない他者が現実社会に存在していることを理解できるから。
- ② 交換可能な基準のある社会のなかに共有不可能な「美しさ」が現れると、覆い隠されていた科学や論理に基づく第三者と共有可能な基準が明らかになり、枠組から外れる存在を可視的に示すことができるから。
- ③ 芸術を享受する体験を通して個人の感覚に支えられた「美しさ」に出会うと、普段の生活では共有可能なものとして当たり前になってきた世界のなかに、理解しえないものが存在することを認識できるから。
- ④ 他者には説明ができない芸術の本質に触れると、分節化することで他の誰とでも共有されうる「美しさ」の発見ではなく、個人による感覚が最大限尊重される望ましい社会の姿に目を向けることができるから。

問6 傍線部E「『作品』を制作するということ」とあるが、このことに対する筆者の考えとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

10。

- ① 「作品」を制作することは、自分自身でも予想のできない「美しさ」の出現に立ち会うことによって、固定化された自己が揺るがされる行為であると考える筆者は、「作品」の受容者の前にも見知らぬ世界が立ち上がることを、難しいながらも願っている。
- ② 「作品」を制作することは、個人の主観的な感覚を基準とした「美しさ」を目指すと同時に、自身の美的感覚に変容を迫られる瞬間の反復であると考える筆者は、「作品」の受容者に「美しさ」という概念の虚構性を、難しいながらも届けようとしている。
- ③ 「作品」を制作することは、作者自身のモチーフから「作品」が逸脱する過程を目にすることで、かけがえのない自己や新たな世界に気づくことであると考える筆者は、「作品」の受容者の認識をよりよく変化させることを、難しいながらも実践している。
- ④ 「作品」を制作することは、客観的で社会的な価値を持つ「美しさ」を探すことではなく、誰にもわからない「美」を完成させることであると考える筆者は、「作品」の受容者に交換不可能な世界の存在を気づかせることを、難しいながらも目指している。

第2問

次の文章は、遠藤周作「影に対して」の一節である。小説家志望の勝呂は、現在、翻訳の仕事で生計を立てている。そのなかで、彼は母のことを思い出ししては現在の自分の生き方について考えるようになる。本文は、戦前の中国大陸で過ごした少年時代に病気で入院したときの回想から始まっている。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。(配点 45)

「夏休みがすぐだから、学校をそんなに休まないで、よかったね」と母は言った。「新学期がくればまた登校できるわよ」

そんなに長く入院をしていなければならぬのかと尋ねると、母は困ったような表情でうなずいた。だが、真実、勝呂は早く治るよりはこのまま入院が長びくことを心で願っていた。病気のおかげで、自分が母を独占できたことを子供心にも知っていたからである。ヴァイオリンから母を奪うためには、彼が治らぬことが必要だった。窓には幾つかの植木鉢が並べられ、そのなかには母の好きなゴムの樹もあつた。だがある日、熱のひいた彼がうたた寝からふと眼を開けると、椅子に腰かけた母が、こちらに気がつかず、膝の上に肘をつくようにして、左手の指をしきりに動かしていた。彼女が今、何をしているのかがわかつた時、勝呂の心には寂しさと怒りに似た気持とが同時にこみあげてきた。彼は汗でぬれた寝巻を変えてくれと母に怒鳴り、着変えさせてもらったあとともこの寝巻は気に入らぬと言いつづけた。母は最後には怒り部屋を出ていった。

父の姉夫婦が奉天から大連に移ってきたのはこの入院中である。勝呂が二十数年たった今でも憶えていることは、病院で、伯母と母との間で行われた言い争いである。はじめはいかにも親しげに話しあっていた二人が、突然、口論をはじめた理由は子供の勝呂にはよく掴めなかつたが、伯母は金歯のいっばいはいった口をとがらせながら、

「ヴァイオリンもいけれど、女はまず家をまとめるのが仕事だと思っけどね」

この嫌味に母がどう答えたかは憶えておらぬ。記憶にあるのは、膝の上でハンカチを握りしめている彼女の手が震えていたことである。

15 「この子が病気になるたのも」伯母はたたみかけるように「あんたが音楽ばかりにかまけて見てやらなかつた為じゃないのかい」

この言葉を父が伯母に言わせたのか、それともそれは伯母自身の前からの考えだったのかどうかはわからない。母がこの言葉にはじめて、自分を他人がどう見ているかに気づいたのか、わからない。とに角、その真夜中、勝呂は額にあの指を感じて眼をさました。母は泣いていた。しかし彼はなにも気づかぬふりをして寝床のなかで躰を硬くしていた。

20 退院したあとも、母はヴァイオリンを弾かなくなった。母は普通の母親と同じように、学校から戻る勝呂にはホットケーキをよく作ってくれた。ホットケーキにはドリコノ(注2)を沢山かけてあった。

三ヶ月前に翻訳した推理小説が、考えていたよりもずっと売れた。売れたと言っても、もちろんベスト・セラーなどに到底入るほどではないが、一、二の週刊誌が書評にとりあげてくれると、売行きが早くなりはじめた。彼の翻訳料は買とり制だったから版を重ねても支払額は一定していたが、出版社では気をきかせて二万円ほど別に送金してくれた。

25 妻と子供をつれて街に出た。祭の日で街は人ごみで溢れていた。警官が沢山辻々に立って、歌を合唱しながら歩いてくるデモの行列を整理している。

デパートの屋上で子供を遊ばせた。回転する大きなコップに親子三人で乗った。ゆっくりとのぼっていく飛行機にも乗った。飛行機の中からは灰色の東京の街がどこまでも見渡せた。

30 妻のために帯と、自分のために外国製の万年筆を買うと、もらった二万円はすぐなくなってしまった。惜しいわ、帯なんかいらなかったのにと、妻は半ば嬉しそうに、半ば残念そうな顔でしきりに咬いたが、勝呂は、ケチケチするなよ、前から欲しがっていたんだろと答えた。

食堂で子供にはホットケーキを、妻にはアイスクリームをとってやり、自分は麦酒を飲みながら窓の下を見おろすと、もうデモの行列は終って、その代り沢山の家族づれが歩いているのが見えた。幸福感に似た感情がゆっくりと胸に湧いてくる。

「親子三人で」と妻はクリームをなめながら「こんな贅沢ぜいたくしたなんて始めてね」

35 「たまにはいいさ。これからも、時々、やろうよ」

答えながら彼は心の中で、こういう生活がなぜ悪いんだと急に考えた。なぜ今更、小説を書く必要があるんだ。俺はこうして結構やっているじゃないか。なぜこの結構な毎日を自分で恥ずかしがる必要があるんだと思った。その時、まるで残酷な悪戯のように勝呂の頭にあの母の死顔が浮かんできた。

40 長い間、もう母はヴァイオリンを弾かなかつた。茶褐色の楽器は弱音器や弓と一緒にケースの中に入れておかれて応接間の隅にいつも転がっていた。母のいない留守、勝呂はおそろおそろそのケースをそつと開いて見ることがあったが、絃をはずされたヴァイオリンはひどくわびしくみえ、弓の先に老婆の白髪のような線がついていた。

昔とちがつて母は満人の女中を指図して食事を作ったり、庭に花を植えたり、彼の勉強を手伝ってくれた。あの頃、勝呂には母の寂しさを感じるよりは自分の手に戻った彼女との生活がただむしように嬉しかったのを憶えている。

45 **B** 父も満足そうだった。日曜日、彼は花壇の前にしゃがんで何時間も草をぬいたり、チュウリップの苗を植えていた。外では満人の物売りが籠にどっさり入れた海老を片言の日本語を使いながら売りにくる。庭のアカシヤに真白い花が咲き、勝呂はその花房を母からもらった香水瓶の中に入れて遊んだ。本屋では内地より一週間ほど遅れて少年倶楽部が届く。学校から戻ると彼はそれを見ながら日が暮れるまで「冒険ダン吉」や「日の丸旗之助」の漫画を書く。

「平凡が一番いい」その頃から父は何処の本で読んだのか、しきりにその言葉を繰り返しかえした。「家族の誰も病気せず、何の風波もないのが倅せというものだ。平凡を笑う者は平凡に仕返しされる。人間、高望みをしてはいけない」

その言葉を、母を諭す意味で父がどこかの本から探してきたのかどうかはわからない。その言葉を言われて母がどのような表情をしたかも憶えていない。

55 もちろん、父と母との間に小さな諍いがなかつたわけではない。たとえば、月の終りになると父はソロバンを片手に、母のつけた家計簿の頁をめくりながらしきりに珠をはじく。それから小声の、しかし、ぐずぐずした説教が始まる。母は黙ってそれを聞いている。説教がすむと、心配そうに二人を見つめている勝呂に母は哀しそうな微笑をかける。そういう、小さな諍いを

除いては、二人は世間並みの夫婦の落ついた生活を営んでいるように子供の眼にも見えた。

大陸性の大連は夏と冬とが一番長い。大連の夏のことを考える時、勝呂はきまつて強い直射日光にさらされた大広場(注7)や西公苑(注8)

を思いだす。葉の萎えたアカシヤの下で上半身裸の苦力たちが死んだように地面にころがり眠っている真昼、街にはほとんど人影もなく、辻々には客のいない馬車(注9)の馬だけが蠅を尾で追いながらしきりに毛のぬけた足を動かしている。そんなある日、母は日傘をさしたまま勝呂をつれて黙つて歩いていった。黙つたまま、どこまでも歩いた。勝呂が時々、話しかけても、**b** 哀しそ

うなずくだけで返事をしなかった。どこへ行くのと、訊ねても首をふるだけだった。やつとミルク・ホール(注9)で彼にアイスクリームをたべさせながら、自分はさじを取りあげようともせず、何かを考えこんでいた。

「どうしたの」勝呂はクリームを食べるのをやめて母の顔を見あげた。「元氣ないよ。病氣なの」

心配しなくていい、と母は首をふり、**c** 哀しそくに微笑した。帰りがけ、彼女は浮袋を買い、次の日曜日もし晴れていたら海水浴に連れていくと約束した。

こういうような生活が一年つづいた。誰も母がヴァイオリンを弾かなくなったことを不思議には思わない。彼女が普通の主婦と同様にこまごまとした家事に没頭したり、勝呂の宿題を手伝っているのを見ても、**かわ** 変つたと言う者もいなくなった。父がそのころ勤めていた満鉄(注10)の社員たちが来れば、母は、夜遅くても、満人の女中を手伝わせて、酒を幾度も運んだ。客が酔つて大声で軍歌を歌う時、母は**d** 哀しそうな微笑でじつとその姿をみつめていた。

70 母の音楽学校時代の友人であるSさんが大連にやってきたのはその年の冬だったろうか。その女性は既にヴァイオリンの奏者として、日本でも有名な人だったから、母がかつて演奏会をひらいた青年会館は満員だった。内地の匂いに飢えている満鉄の若い社員たちがつめかけたからである。演奏会が終つたあと、そのSさんは勝呂の家に来て泊つた。勝呂は母とその女性との間に寝かされたから、闇のなかで二人のとり交す会話をじつと聞いていた。

「あなたがねえ……、こうなるとは思わなかったわ」とSさんは、うつ伏せになり煙草(注11)に火をつけながら言った。「もう弾かないの」

「駄目よ。指がなまっちゃって」

「倅せなの」

充分、満足していると母は、はつきりと答えた。闇にうごく煙草の赤い火口をみつめながら、勝呂は嬉しい気持ちでその返事を聞いていた。今、考えれば、あの母の返事は音楽学校時代の友人への対抗心から出たのだろうが、**C** まだ小学校五年生だった彼には裏にある感情まで到底、みぬくことはできなかつたのである。

(注) 1 奉天から大連——奉天は中国遼寧省の省都・瀋陽の旧名。大連も同省の都市名。日露戦争後から第二次世界大戦終戦まで、日

本の実質的な統治下にあった。

2 ドリコノ——澄んだ黄金色で、甘みの強い滋養飲料。昭和初期に大流行した。ここでは原液が使用されている。

3 弱音器——楽器の音量を抑制したり、音色を変えたりする装置。

4 満人の女中——満人は、「満洲国」設立などで大陸に侵出していた当時の日本が、現地中国人を広く呼んだ言い方。見下した語感をもつて使われる場合があった。女中は、雇われて家事をする女性に対する当時の呼称。

5 内地——終戦以前に海外で統治していた土地(外地)に対して、日本本国の領土のことを指す。

6 少年倶楽部——月刊少年雑誌。「冒険ダン吉」や「日の丸旗之助」は連載されていた漫画作品。

7 大広場や西公苑——大連の広場と公園の旧名称。

8 苦力——荷役などに従事する労働者。

9 ミルク・ホール——牛乳を中心にパンなども扱う軽食店。

10 満鉄——南満洲鉄道株式会社の略称。

問1

傍線部A「彼女が今、何をしているのかがわかった時、勝呂の心には寂しさと怒りに似た気持とが同時にこみあげてきた。」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

11

- ① ヴァイオリンの練習と子供の看病とをなんとか両立しようとする母の様子を見て、母の足手まといになっていることを後ろめたく思うとともに、自分の気持ちをわかってくれない母に対し憤りを覚えたということ。
- ② ヴァイオリンを弾いているような仕草をする母の様子を見て、母を独り占めできないことを切なく思うとともに、自分が病気のときでさえヴァイオリンのことを忘れられない母に対しいらだちを覚えたということ。
- ③ ヴァイオリンへと気持ちが向かい始めた母の様子を見て、入院生活が終わると母を占有できなくなることを悲しく思うとともに、母のあらゆる所作に難癖をつけて八つ当たりしたいという衝動を覚えたということ。
- ④ 看病の合間を縫ってまでヴァイオリンの練習をしようとしている母の様子を見て、楽器にすら勝つことができない自分を哀れに思うとともに、自分から母を奪ったヴァイオリンに対する憎しみを覚えたということ。

問2 傍線部B「父も満足そうだった。」とあるが、そのように見えたのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の

①、④のうちから一つ選べ。解答番号は

12。

- ① 父は「苗を植え」(45行目)たり植栽したりすることに喜びを感じ、母に対しても庭いじりに満足をするような慎ましい生き方を求めており、その結果、母は草花に愛情を注ぐことを日課とするようになっていたから。
- ② 父は「家族の誰も病気せず」(49行目)に過ごすことが幸せだと信じ、母に対しても音楽のせいで心身に支障をきたすことがないように求めており、その結果、母は勝呂や家族の健康のために力を尽くしていたから。
- ③ 父は「平凡を笑う者は平凡に仕返しされる。」(50行目)と考え、母に対してもヴァイオリンに没頭して家族を顧みない態度をあらためることを求めており、その結果、母はその求めに応じる日々を過ごしていたから。
- ④ 父は「人間、高望みをしてはいけない」(50行目)ということを重視し、母に対してもヴァイオリンでの成功を望まないように求めており、その結果、母は演奏の練習を休止し家族との生活に感謝しようとしていたから。

問3

55行目から69行目に見られる波線部 a「哀しそうな微笑をかける」b「哀しそうにうなづく」c「哀しそうに微笑した」d「哀しそうな微笑でじっとその姿をみつめていた」を含む各場面での母の様子についての説明として最も適当なものを、次の

- ① ④のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

① 波線部 aを含む場面は、不安げに見つめている勝呂の存在に気がついているところではあるが、母が父の小言に対して実は不満を抱いていることを勝呂にさとられないように、気をそらそうとしている。

② 波線部 bを含む場面は、話しかけてくる勝呂にかりうじて反応を示しているところではあるが、日頃の抑圧された状況のせいで勝呂の存在まで腹立たしく感じてしまうほどに、追い詰められている。

③ 波線部 cを含む場面は、母を思う勝呂の気遣いに応えようとしているところではあるが、安心させたいという思いとは裏腹にうまくふるまえずに、息子の憂慮を確信へと深めさせてしまっている。

④ 波線部 dを含む場面は、勝呂に見られていることを認識しているとは言えないところではあるが、求められる役割を果たしてきたなかで染みついた表情に、積み重なった辛さがにじみでてしまっている。

問 4 傍線部 C「まだ小学校五年生だった彼には裏にある感情まで到底、みぬくことはできなかったのである」とあるが、この部

分の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

① 子供の頃の勝呂は、母がヴァイオリンをやめて自分や家族との時間を優先する生活に満足していると答えたことを嬉しく感じていた。しかし、勝呂が本意ではない人生を歩んでいる今は、母の心情に気づけなかった自分に対する未熟さを痛感するとともに、その言葉が友人への反発から出たものであったことを理解している。

② 小学生だったときの勝呂は、母が当時の生活に充分幸せだと言いつつ何を何の疑いも持たず素直に喜んでいた。しかし、勝呂が自分でも伴侶を得た今は、母の父に対する愛情を実感するとともに、その言葉の背後に、友人が暗に非難している父をかばおうとする母の気持ちが込められていたことを理解している。

③ 当時の勝呂は、指がなまってしまうという母の言葉をヴァイオリンへの決別として嬉しく聞いていた。しかし、勝呂が自分も子供を持った今は、その言葉の裏にあつた現実と理想との間の葛藤に共感するとともに、子供を育てながら音楽を続けていくことの難しさに無理解な友人への不満が含まれていたことを理解している。

④ 少年時代の勝呂は、母の答えが自分への愛情ゆえに言ってくれたものだと思つて嬉しく聞いていた。しかし、勝呂が母を亡くした今は、自分の反応の浅はかさに対して後悔するとともに、その言葉が、時々痼癢かんしやくを起こす勝呂やぐずぐず説教する父への当てつけとして友人につい漏らしてしまったものであったことを理解している。

問5 本文の表現に関する説明として適当でないものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

① 「考えだったのかどうかはわからない」(16行目)や「気づいたのか、わからない」(17行目)のような表現が繰り返されることによって、勝呂の状況判断に留保のあることが表されており、それとは対照的に場面の出来事については明確な事実として記憶していることが強調されている。

② 少年期と現在の両方で、「ホットケーキ」(19行目、20行目、32行目)や「アイスクリーム」(32行目、61～62行目)という共通のものが描かれることによって、西洋文化の伝播の象徴として効果的に表現されており、現在の状況と過去の記憶を比較する役割が果たされている。

③ 少年期の描写では「苦力」(58行目)や「馬車」(59行目)といった言葉が用いられることにより、現在いる東京から遠く隔たる異郷にかつて暮らしていたことが具体的な様子とともに表現されており、現在と過去の意識の空間的、時間的な隔たりが表されている。

④ 「誰もく不思議には思わない。」(66行目)や「変わったと言う者もいなくなった」(67行目)という言葉には、母がヴァイオリンをやめたことを時間とともに当然と受容している周囲の様子が表されており、当初は意外性をもって受け止められていたことが婉曲的に示されている。

問 6

授業で本文を読んだNさんは、二重傍線部「その時、まるで残酷な悪戯のように勝呂の頭にあの母の死顔が浮かんできた。」という表現が最も印象に残った。これについてより深く考えるために、Nさんは「影に対して」の全文を読んだ。Nさんは二重傍線部から抱いた疑問点二つを挙げたうえで、それぞれに関わると考えた場面を抜粋し考察したものを次の「フート」にまとめた。後に示すのは、「フート」とそれに基づいたNさんとYさんとの対話である。これらを読んで、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

【フート】

〈疑問①〉「あの母の死顔」とあるが、それはどのような死顔か？

〔抜粋①〕大人になった勝呂が、かつて父から向けられた言葉と、母の死顔を回想している場面

「小説や絵など、そういう世界に入る奴は結局、みじめたらしく死んでいくもんだ」

そう、母は彼女の住んでいる貧しいアパートで誰からも看られず死んでいった。知らせを聞いて勝呂が駆けつけた時は、母の死体のそばには電話をかけてくれた管理人のおばさんが一人、おろおろとして坐っているだけだった。血の気もなく紙より青白くなったその死顔の眉と眉との間に、苦しそうな暗い影が残っていた。

〈疑問②〉母の人生はどのようなものだったのか？

〔抜粋②〕両親の離婚後、音楽教師をしている母から、離れて暮らしている勝呂へ送られた手紙

母さんは他のものはあなたに与えることはできなかつたけれど、普通の母親たちとちがって、自分の人生をあなたに与えることができるのだと——それを今はあなたにたいするおわびの気持と一緒に自分に言いかけさせているのです。*アスハルトの道は安全だから誰だって歩きます。危険がないから誰だって歩きます。でもうしろを振りかえってみれば、その安全な道には自分の足あとなんか一つだって残ってはいやしない。海の砂浜は歩きにくい。歩きにく

いけれどもうしろをふりかえれば、自分の足あとが一つ一つ残っている。そんな人生を母さんはえらびました。あなたも決してアスハルトの道など歩くようなつまらぬ人生を送らないで下さい。

*アスハルトIIアスファルト。路面舗装。

◎母は

I

生き方をした人であったと考えられる。

Nさん——私は二重傍線部を解釈するために、授業で読んだ箇所以外に「あの母の死顔」が描かれている場面と、母の生き方がわかる場面を抜粋しました。ここから母は I し、「フート」の考察では二重傍線部全体の解釈としてはまだ物足りないように感じています。

Yさん——勝呂が「母の死顔」を想起する背景に、そのような母の生き方が提示されていることが、他の抜粋箇所も示してもらうことでよくわかりました。そうなると母のことは美化されて想起されてもよいはずなのに、なぜそれを「まるで残酷な悪戯のように」と勝呂は感じたのでしょうか。この表現について何か考えはありますか。

Nさん——確かにここは独特な表現ですよね。その点についても考えると二重傍線部の解釈が深まりそうです。結局、「母の死顔」が浮かんだタイミングと状況を踏まえるならば II と解釈できるように思います。

(i) 空欄 **I** には「フート」における抜粋部分を根拠とした発言が入る。ここに入るものとして最も適当なものを、次の

① ～ ④ のうちから一つ選べ。解答番号は **16**。

- ① 周囲の理解を得られずに最後まで苦しみを伴った孤独な人生ではあつたけれども、誰もが歩める安全な道ではなく、自分にしか歩めない道を進んでいこうとした
- ② その厳しさに最後はくじけてしまった悲惨な人生ではあつたけれども、誰かを模倣する安楽な道ではなく、危険と困難をとまなう独創的な道をあえて進もうとした
- ③ 家族の意向を優先して時に自分を抑えることを強いられた哀れな人生ではあつたけれども、最後まで世間的な幸福ではなく、自分が偉業を成し遂げることを追い求めた
- ④ 父の言葉が的中したかのような憐れで情けない人生ではあつたけれども、選んだ道が自分のためではなく、息子への教えになるようにと自らを律し続けた

(ii) 空欄 **II** には本文と「ノート」における抜粋部分を根拠とした発言が入る。ここに入るものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は **17**。

- ① まず勝呂は、現在の生活に満足しようとしているけれども、そのようなときに限って後ろめたさを突きつけられる点が「残酷」です。加えて勝呂にとって母は別居した後も自分を気遣ってくれた存在で、そのような母を独り死なせてしまった後悔をより鮮明に呼び起こすところに「残酷な悪戯」としての認識がある
- ② まず勝呂は、現在の家庭生活を大事にする生き方を肯定しようとしているけれども、そのようなときに限って戸惑いを生じさせられる点が「残酷」です。加えて勝呂にとって母の行為は愛情を感じるもので、時に行き過ぎた愛情としての独善性や束縛をも感じるところに「残酷な悪戯」としての認識がある
- ③ まず勝呂は、現在の自分の生き方を恥じる必要はないと思いつつしているけれども、そのようなときに限って母が責めているように感じる点が「残酷」です。加えて勝呂にとって母の教えを守れなかったことは彼に反省を迫るもので、恥の意識を突きつけてくるところに「残酷な悪戯」としての認識がある
- ④ まず勝呂は、今の人生に妥協しようと自身に言い聞かせているけれども、そのようなときに限って母を思い出す点が「残酷」です。加えて勝呂にとって母が示した道とは未練が残るもので、再び迷いを生じさせ簡単に自身のあり方を定めさせてくれないところに「残酷な悪戯」としての認識がある

第3問

自分の好きな本を一冊選び、その本にどのような工夫が見られるかについて考えるという課題を与えられたMさんは、『イワシ むれで いきる さかな』という絵本に見られる工夫に注目し、自分の考えをまとめ、下書きを始めた。次の【文章】はMさんの下書きの一部であり、後の【資料Ⅰ】と【資料Ⅱ】は、【文章】を書くための資料としてMさんが準備したものである。これらを読んで、後の問い(問1～3)に答えよ。(配点 20)

【文章】(段落に①～④の番号を付してある。)

① 私は生き物が好きだ。生き物を好きになったきっかけは、幼い頃に『イワシ むれで いきる さかな』という絵本を読んだことだった。今回はこの絵本を取り上げ、小さな子どもに生き物の世界の魅力を伝えるためにどのような工夫がなされているかについて考えたい。【資料Ⅰ】は子どもを対象とした科学的な内容の絵本の編集者へのインタビュー記事、【資料Ⅱ】は『イワシ むれで いきる さかな』の内容を私自身が抜粋したりまとめたものである。

② 【資料Ⅰ】からは、絵本では伝えたいメッセージを絞ることが重要であること、そして、ここで話題になっている絵本のメッセージは「イワシは群れて生きる」であることがわかる。その編集方針どおり、絵本では、読者に感じてほしいことを強く打ち出しながら数多くのイワシが集まり群れをなして生きる様子を描いていることが、【資料Ⅱ】からも読み取れる。

③ 絵本に込められた短いメッセージは、ストーリーという形で肉づけされている。【資料Ⅱ】で抜粋した絵本の前半部分について、ストーリーの構成を順に整理すると、
a イワシが群れをなして泳ぐ姿を紹介すること、
b イワシが何を食べて生きているかを示すこと、
c 「バシャーーン!」という音で迫力を出すこと、
d コアシサシを例にイワシが食べられる姿を描くことから成り立っている。このようなストーリーによって子どもたちを絵本の世界に引き込みつつ、イワシの種としての生き方を伝えている。

4

X

【資料Ⅰ】 科学的な内容の絵本の編集者へのインタビュー記事の抜粋

欲張っても、そんなに多くの中身を盛り込めません。ましてや読者が5、6歳の子どもですから、二兎を追う者は一兎をも得ずということにならないよう、絵本に込めるメッセージを絞ります。

たとえばこの『イワシ むれで いきる さかな』なら「イワシは群れて生きる」というたった一行。「群れ」という生物界での生存戦略を紹介する絵本です。それがどういことなのかを、ストーリーを通して感じさせる。それ以外の、イワシが何科なのか、イワシにはどんな仲間がいるかなど、物語に不要な情報はすべて削りました。この本で感じてほしい驚きや発見を際立たせる上で必要な知識なのか、ストーリーにとって障害物になる情報なのかを精査し、どんどん研ぎ澄ませます。情報を知ってほしいのではなく、驚きや発見を通じて、作者や編集部が読者に感じてほしい一つのメッセージが伝われば充分です。

やまがたまさ や
(山形昌也氏へのインタビュー記事「科学絵本のアプローチ」をもとに作成)

【資料Ⅱ】 Mさんによる絵本『イワシ むれで いきる さかな』の抜粋とまとめ

〈前半部分の抜粋〉*元の絵本でページをめくる箇所を1行空けて示した。

うみのなかを、おおきな かたまりが うごいています。ゆらゆらと かたちをかえながら、ときおり きらりと ひかっています。

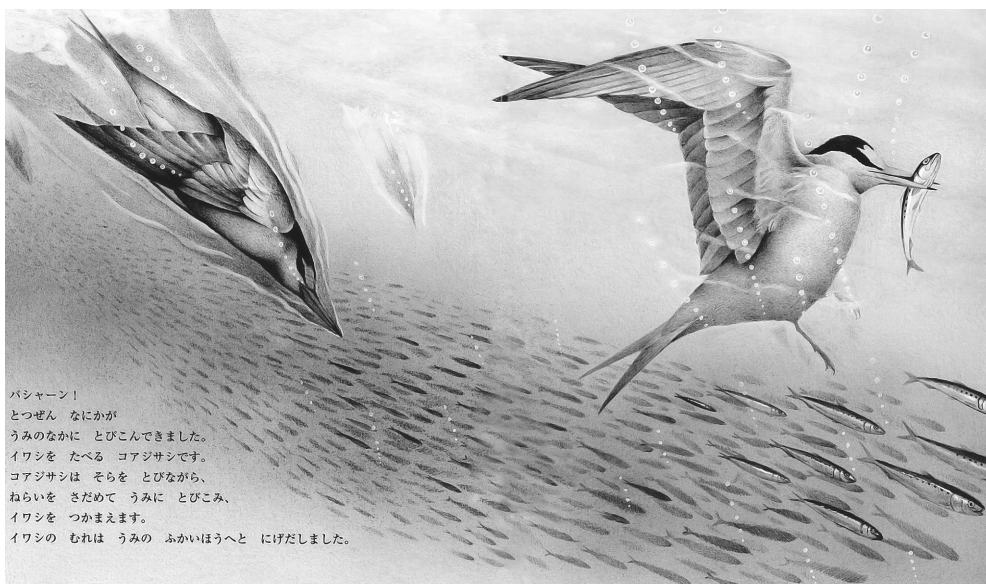
イワシの むれです。かぞえきれないほど たくさんの イワシが あつまって、むれを つくっていたのです。

イワシは うみに すむ さかなです。えさを もとめて うみのなかを いつも むれで およいでいます。

イワシが くちを おおきく あけて およぐと、えさの プランクトンが どんどん くちのなかに はいってきます。プランクトンは みずのなかを ただよって くらす いきものです。

イワシの むれは プランクトンを たべながら うみの ひょうめんちかくまで やってきました。すると……

バシャーーン！ とつぜん なにかが うみのなかに とびこんできました。イワシを たべる コアジサシです。コアジサシは そらを とびながら、ねらいを さだめて うみに とびこみ、イワシを つかまえます。イワシの むれは うみの ふかいほうへと にげだしました。



バシャーーン！
とつぜん なにかが
うみのなかに とびこんできました。
イワシを たべる コアジサシです。
コアジサシは そらを とびながら、
ねらいを さだめて うみに とびこみ、
イワシを つかまえます。
イワシの むれは うみの ふかいほうへと にげだしました。

図1 絵本の前半部分の一場面

〈中間部分のあらすじのまとめ〉

他の生き物に食べられたり人間に捕まったりして、イワシの群れは小さくなるが、小さい群れが集まってまた大きな群れになる。春にかけて数えきれないほどの卵が生まれ、そこから育ったイワシの子どもが、また新しい群れを作る。

〈最終ページの抜粋〉

これから この イワシの むれも、ほかの いきものに なんども ねらわれる ことでしょう。でも、かぞえきれないほど たくさんいる イワシが、すっかり たべられてしまうことはありません。いきのびた イワシは、また たくさんの たまごを うみます。むれで いきる イワシは こうして これからも いきつ づけるのです。

おおかただあき
(大片忠明『イワシ むれで いきる さかな』をもとに作成)
* 絵本での改行は省略し、1ページごとに形式段落としてまとめた。

問1 Mさんは、【文章】の2段落にある傍線部「読者に感じてほしいことを強く打ち出しながら」について、【資料Ⅰ】と【資料Ⅱ】を見直した結果、より具体的な表現に修正することにした。修正後の表現として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 18。

- ① 優雅に漂ったりすばやく動いたりして広大な海の中を自由自在に泳ぐイワシの美しさや力強さを読者に示しながら
- ② 多くのえさをおびきよせたり外敵に食べられないようにしたりするイワシの知恵や工夫を読者に示しながら
- ③ 食べられたり捕まえられたりしつつも生き残ったものが命をつないでいくというイワシの営みを読者に示しながら
- ④ 何度も狙われたり群れごと食べられたりしても仲間との共生を好むというイワシの習性を読者に示しながら

問2 【文章】の3段落を読み直したMさんは、この段落の趣旨にそぐわない箇所を削除することにした。削除する箇所として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 19。

- ① 波線部 a「イワシが群れをなして泳ぐ姿を紹介すること」
- ② 波線部 b「イワシが何を食べて生きているかを示すこと」
- ③ 波線部 c「『バシャーーン!』という音で迫力を出すこと」
- ④ 波線部 d「コアジサシを例にイワシが食べられる姿を描くこと」

【資料Ⅲ】 イワシに関する他の本の抜粋

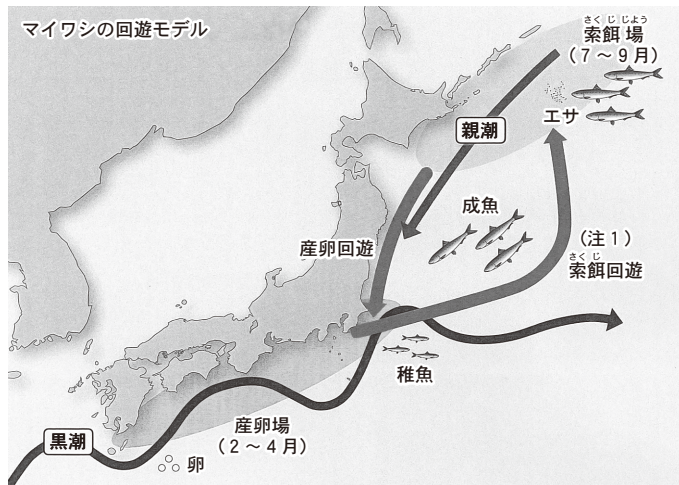


図2 マイワシの回遊モデル

マイワシの産卵期は12～6月。主な産卵場は鹿児島宮崎沖から伊豆諸島周辺の黒潮の海です。直径1mmの卵は生み出されてから2～3日でふ化し、黒潮にのって広がります。最初に食べるエサは動物プランクトンですが、このエサの量が少ないと成長できず、弱ったイワシはすぐに食べられてしまいます。イワシ類の仔魚(注2)がどれくらいの割合で死ぬかを調べた研究では、1日の死亡率は20%と推定されました。10000尾は次の日には8000尾に減り、10日後には1074尾、30日後はわずか12尾という厳しさです。

30～50日間は自力で泳ぐことができず、黒潮の流れまかせですが、初夏になると、力をつけた稚魚の群れは黒潮から離れ、動物プランクトンが豊富な冷たい親潮域に向かって回遊をはじめます。「親潮」とは子を育てる親のように栄養となるエサが豊富という意味です。(中略)

秋になるとマイワシは南へ向かいます。まだ産卵しない未成魚は常磐沖から房総半島沖の暖かい海で冬を越します。成魚はもっと南の産卵場まで回遊します。

こうして冬～春に産卵、夏に北上し、秋に南下を繰り返すのです。南下するのを「下りイワシ」といいます。

(東京水産振興会『世界はイワシでできている?』をもとに作成)

- (注) 1 索餌——餌を探し求めること。
2 仔魚——ふ化直後からひれや骨格ができあがる段階までの魚。

問3 Mさんは、『イワシ むれで いきる さかな』の特徴を明らかにするために、他の本と比較した内容を【文章】の4段落にある空欄Xに書くことにしている。そのため、【資料Ⅱ】で描かれたイワシの種類がマイワシであることを確認し、比較対象として次の【資料Ⅲ】を準備した。これを読んで、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

(i) Mさんは、空欄 **X** に書く内容の準備として【資料Ⅱ】と【資料Ⅲ】を比較し、それぞれの特徴を次の表にまとめた。

a 欄と b 欄に書くこととして誤りを含むものを、後の ① ～ ⑥ のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

解答番号は

20

21

	【資料Ⅱ】の特徴	【資料Ⅲ】の特徴
a		
b		

- ① a 【資料Ⅱ】図1によって、イワシが直面する命の危険性を、切迫感をともなう形で伝えている。
b 【資料Ⅲ】図2によって、イワシの索餌に関する標準的な場所や餌の捕食方法を、視覚的に示している。
- ② a 【資料Ⅱ】図1によって、イワシに関するストーリーの一場面の情景をわかりやすく伝えている。
b 【資料Ⅲ】図2によって、イワシが生まれてから成長し産卵するまでの動きをおおまかに示している。
- ③ a 「ていまず」や「てきます」などを用いて、精選した情報をリアリティーをもって伝えようとしている。
b 「12 ～ 6月」や「秋」という具体的な時期を示しながら、時系列に沿って事実を伝えようとしている。
- ④ a 擬音語や擬態語を用いることで、登場する生き物たちの様子をより想像しやすくしている。
b 具体的な数値を挙げることで、イワシの仔魚が減っていく様子をより理解しやすくしている。
- ⑤ a ある群れに起こった出来事を取り上げて述べるという方法で、イワシの生態を伝えている。
b 解説の対象を特定の群れに限定しない形で述べる方法で、イワシの生態を伝えている。
- ⑥ a 情報を限定して短い文で書き表していくことで、生き物の世界の厳しさを強調し過ぎないようにしている。
b 研究の成果や専門的な知識を詳しく紹介することで、イワシの生存戦略を理解できるようにしている。

(ii) Mさんは、【資料Ⅱ】に見られる工夫を考察するため、【資料Ⅱ】と【資料Ⅲ】の比較結果の分析に基づいて、今後の方針を考えている。比較結果の分析と今後の方針の内容として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 22。

- ① 比較した結果、【資料Ⅱ】には、情報の取捨選択や独創的なストーリー展開といった、子どもに生き物の世界の魅力を伝えることにつながる複数の特徴があった。これをふまえ、今後はこれらの特徴が【資料Ⅱ】に特有のものかどうかを検討するために、さまざまな科学的な内容の絵本を用意して【資料Ⅱ】と比較する。
- ② 比較した結果、【資料Ⅱ】には、情報の取捨選択や個別事例の詳述といった、子どもに生き物の世界の魅力を伝えることにつながる複数の特徴があることがわかった。これをふまえ、今後は【資料Ⅲ】の特徴にも着目し、科学的な内容についてわかりやすく伝える方法を検討するために、さまざまな科学的な内容の本を用意して【資料Ⅲ】と比較する。
- ③ 比較した結果、【資料Ⅱ】には、情報の取捨選択や臨場感のある描写といった、子どもに生き物の世界の魅力を伝えることにつながる複数の特徴があることがわかった。これをふまえ、今後は【資料Ⅱ】に他の特徴がないかどうかを検討するために、さまざまな本を用意して【資料Ⅱ】と比較する。
- ④ 比較した結果、【資料Ⅱ】には、情報の取捨選択や情感あふれる表現といった、子どもに生き物の世界の魅力を伝えることにつながる複数の特徴があることがわかった。これをふまえ、今後は【資料Ⅱ】以外の絵本にはどのような特徴があるのかを検討するために、さまざまな絵本を用意して【資料Ⅲ】と比較する。

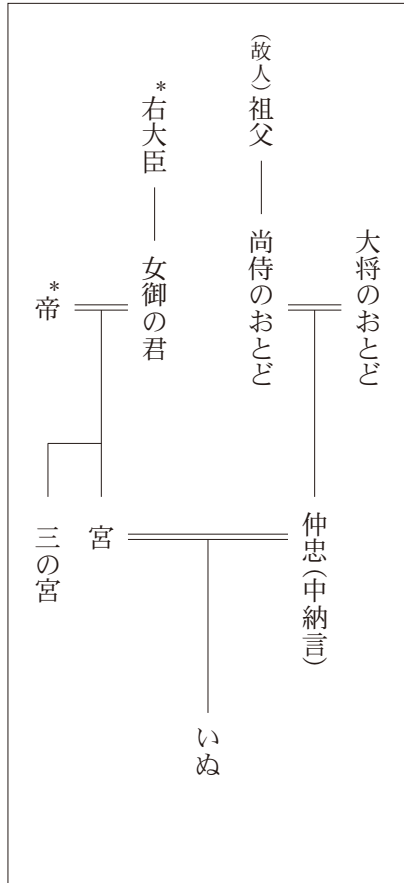
第4問

次の文章は、『うつほ物語』の一節である。仲忠(本文では「中納言」君)は、祖父が異国で天人たちより伝授された琴とその奏法を、母(本文では「尚侍のおとど」とともに大切に守り伝えてきた「琴の一族」である。本文は、仲忠の妻(本文では「宮」が娘(本文では「いぬ」「児」)を出産した直後の場面である。これを読んで、後の問い(問1～5)に答えよ。なお、設問の都合で一部本文を省いたところがある。また、本文の段落に 1 2 3 の番号を付してある。(配点 45)

- 1 中納言、「かの龍角(注1)は、賜はりて、いぬの守りにしはべらむ」。尚侍のおとど、うち笑ひて、「いつしかとも、はた。さても、かやうの折には言ふやうかある」とのたまへば、「おほかたのことは、いかがはべらむ。この琴の族(注2)ある所、声する所には、天人の翔りて聞きたまふなれば、添へたらむとて **a** 聞こゆるなり」。尚侍のおとど、典侍(注3)して、大将のおとどに、「かの、おのが琴、ここに要(注4)せらるめり。 **b** 取らせむ」と聞こえたまへれば、急(注5)ぎて三条殿に渡りたまひて、取らせておはしたり。
- 2 三の宮(注6)、取りたまひて、中納言にさし遣りたまひつれば、唐の縫ひ物の袋に入れたり。児を懐に入れながら、琴を取り出でたまひて、「年ころ、この手(注7)を **c** いかにしはべらむと思ひたまへ嘆きつるを。後は知らねど」など(注8)て、はうしやうといふ手を、はなやかに弾く。声、いと誇りかになぎははしきものから、また、あはれにすごし。よろづの物の音多く、琴の調べ合せたる声、向かひて聞くよりも、遠くて響きたり。
- 3 中納言、かか(注9)るべき曲を、音高く弾くに、風いと声荒く吹く。空のけしき騒がしげなれば、「例の、物、手触れにくきぞかし。わづらはし」と思ひて、弾きやみて、尚侍のおとどに申したまふ。「今、曲一つ仕うまつらむとすれど、**(イ)** 騒がしければ、えなむ。これに御手一つ遊ばして、鬼逃がさせたまへ」と聞こえたまへば、「**(イ)** はしたなげにぞあめる」。君、「仲忠がためには、これにまさる折なむはべるまじき」と聞こえたまへば、尚侍のおとど、御床より下りたまひて、琴を取りたまひて、曲一つ弾きたまふ。その音、さらに言ふ限りなし。中納言の御手は、おもしろく凝(注10)しきまで、雲風のけしき、色殊なるを、こ

の御手は、病ある者、思ひ怖ぢ、うらぶれたる人も、これを聞けば皆忘れて、おもしろく頼もしく、よはひまが 齢榮ゆる心地す。かかれば、宮は、御琴を聞こしめしつれば、ただにおはしつるよりも若やかに、わぎを しつるとも思されず、苦しきこともなく起き居たまへり。中納言の君、「悪あしかめり。なほ 臥ふさせたまひて聞こしめせ」と申したまへば、宮、「ただ今は苦しうもあらず。この御琴を聞きつれば、苦しかりつるも、皆やみぬ」とて居たまへり。女御の君・尚侍のおとど、(注13) 「ウ）風邪ひきたまひてむ」とて、騒ぎ臥ふせたまつりたまひつ。琴は、弾き果てたまへれば、袋に入れて、宮の御枕上に、御佩刀(注14)添へて置きつ。

【人物関係図】 「*」印を付した人物は問5に登場する。



(注)

- 1 龍角——仲忠の祖父から尚侍のおとどに受け継がれた琴の一つ。
- 2 声する所には、天人の翔りて聞きたまふなれば——かつて仲忠の祖父が天人から「特別な琴の音色が聞こえるところに訪れよう」という予言を授けられたことをふまえての発言。
- 3 典侍——女官の一人。
- 4 大将のおとど——仲忠の父。
- 5 三条殿——尚侍のおとどと大将のおとど夫婦の邸宅。
- 6 三の宮——宮の兄弟。
- 7 手——ここでは琴の奏法のこと。
- 8 はうしやう——琴の曲名。
- 9 かかるべき曲——子の誕生に際して弾くのにふさわしい曲。
- 10 例の、物、手触れにくきぞかし——以前、仲忠が琴を演奏した折に、天変地異などの不思議な現象が起きたことをふまえての発言。
- 11 御床——ここでは、御帳台みちょうだい(貴人の寝台)の台座のこと。尚侍のおとどは、宮の出産を手伝うために御帳台の内にいた。
- 12 凝しきまで——「凝し」は、険しいの意。
- 13 女御の君——宮の母。
- 14 御佩刀——ここでは守り刀のこと。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

23

25

(ア) 騒がしければ、えなむ

23

- ① 騒がしいので、弾くことができません
- ② 騒がしいので、弾くのをやめてください
- ③ 騒がしくなったら、弾くことができません
- ④ 騒がしくなったら、弾くのをやめてください

(イ) はしたなげにぞあめる

24

- ① 出しゃばってはいけません
- ② 力不足ではないでしょうか
- ③ 体裁が悪いように思います
- ④ 気まづくなるに決まっています

(ウ) 風邪ひきたまひてむ

25

- ① 風邪をおひきになるかもしれません
- ② 風邪をひかせ申し上げるわけにはいきません
- ③ 風邪をひかせ申し上げてしまったようです
- ④ 風邪をおひきになってしまうでしょう

問2 波線部 a ～ d について、語句と内容に関する説明として最も適当なものを、次の ① ～ ④ のうちから一つ選べ。解答番

号は 26。

- ① a「聞こゆるなり」は、「なり」が伝聞の助動詞で、龍角は天人が降臨するほど特別な琴だと仲忠が話に聞いていることを表している。
- ② b「取らせむ」は、「む」が意志の助動詞で、仲忠の願いを聞き入れ自分の琴を与えようと尚侍のおとどが思っていることを表している。
- ③ c「いかにしはべらむ」は、「はべら」が謙讓語で、自身の琴の演奏を卑下する仲忠からの尚侍のおとどに対する敬意を表している。
- ④ d「臥させたまひて聞こしめせ」は、「聞こしめせ」が尊敬語で、見事に琴を弾く尚侍のおとどに対する仲忠からの敬意を表している。

問3

1 段落に描かれる琴をめぐるやり取りに関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解

答番号は 27。

- ① 仲忠は、尚侍のおとどから授かった龍角を、自分といぬがこれからも大切に守り続けてゆくと誓った。
- ② 尚侍のおとどは、いぬに龍角を与えようとする仲忠に対して、誕生早々に気が早いことだと言った。
- ③ 仲忠は、生まれた子に琴を添えるのは一般的なことなので、琴の一族のいぬには当然必要だと述べた。
- ④ 尚侍のおとどと典侍は、相談の上で、大将のおとどに三条殿から龍角を持ってきてもらうことにした。

問 4

2 段落と 3 段落に描かれる仲忠と尚侍のおとどの琴の演奏に関する説明として最も適当なものを、次の ①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 28。

- ① 仲忠の琴の演奏は、待ちに待った我が子が生まれて得意になるあまり、誇らしげな歌声を交えてさまざまな音色を響かせたため、遠くまで聞こえるはなやかなものとなった。
- ② 仲忠の琴の演奏は、にぎやかな音色の中にも恐ろしさを感じさせるものであり、周りの自然にも影響を及ぼし、空や雲の様子を変えて鬼を追い払うほどの強い効果があった。
- ③ 仲忠の琴の演奏は、空模様を一変させ、激しい風を吹かせるような力があつたので、尚侍のおとどはいつものことながら仲忠が琴を弾くのはやっかいなことであると思った。
- ④ 尚侍のおとどの琴の演奏は、子の誕生という自分にとって最上の折だから琴を弾いてほしいという仲忠の願いを受けたもので、その音色は言葉にできないすばらしさだった。
- ⑤ 尚侍のおとどの琴の演奏は、苦しみを忘れて寿命が延びるような気持ちになる効果があり、出産直後の宮もその音色を聞くと体調が回復したため、宮自身も演奏に参加した。

問5

次に示すのは、本文の場面に居合わせた右大臣が、後日、帝にその折のことを報告している際の会話である。これを読んで、この会話と本文に関する説明として最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

29。

(右大臣)「尚(注)侍なむのかみなど琴弾きはべりしほどなむ、興きようはべりしや。いとありがたかりけることぞや」

(帝) 「その琴は、いづれぞ」

(右大臣)「尚侍の、昔より弾きはべりける龍角となむ承りし。それをなむ、かの児になむ取らせはべりにける」

(帝) 「いとみじきもの得たりける女子をんなにもあるかな」

(注) 尚侍——本文の「尚侍のおとど」(仲忠の母)のこと。

- ① この会話で「いとありがたかりけることぞや」と詠嘆の助詞「や」を用いている点からは、尚侍のおとどが琴を弾くのは稀まれなことだと分かるが、本文でも尚侍のおとどは琴の一族以外の人の前で演奏することを最初は拒んでいた。
- ② この会話での「その琴は、いづれぞ」との帝の問いからは、仲忠一族の琴の伝授が他の人にとつても関心の的であったことが分かるが、本文でも仲忠の後継者が長年不在であったことに対する世間の嘆きの声が記されていた。
- ③ この会話での「尚侍の、昔より弾きはべりける龍角」との右大臣の説明からは、龍角は尚侍のおとどが幼い仲忠とともに弾いた思い出の楽器であることが分かるが、本文でも仲忠は龍角の演奏を聞いて幼少時を思い出していた。
- ④ この会話で「それをなむ、かの児になむ」と強意の助詞「なむ」を繰り返す点からは、龍角を誕生直後のいぬに与えるのは特別なことだと分かるが、本文でも仲忠はいぬに授けられた龍角を早速いぬを抱きながら演奏していた。
- ⑤ この会話での「いとみじきもの得たりける女子にもあるかな」との帝の発言からは、尚侍のおとどが並外れた琴の奏法を持ち合わせていることが分かるが、本文でも尚侍のおとどの演奏が仲忠の演奏以上に賞賛されていた。

第5問

次の文章は、江戸時代後期の漢学者である長野豊山（一七八三—一八三七）が著したものである。これを読んで、後の問（問1〜7）に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。（配点 45）

客問レ余曰、「子学レ詩、唐耶、宋耶。」曰、「我、不ニ必唐、不ニ必宋、又、不ニ必唐、不ニ必宋、可レ見、不ニ必二字、是我宗旨也。」

必不唐宋可見不必二字是我宗旨也。

東坡云、「作詩必此詩、定知非詩人、可謂知言矣。窃視世

之詩流、不問詩之巧拙、党同伐異、忿争如狂。是雖狹見

使然、不亦已駭一乎。

有下人極口罵白石・南郭、以為偽詩。余請觀其詩、立

意陳腐、但多用生字、以掩其拙。余因謂曰、「白石・南郭、

誠ニ作リ偽ニ詩ヲ吾子誠ニ作ル真ニ詩ヲ然レドモ吾子之ハ詩ハ譬タケバ真ニ瓦也也注11。二子之

詩ハ、譬ハバ偽ニ玉也。真瓦之価、廻ハルカニ在リト偽玉之下ニ。

(『松陰快談』による)

(注) 1 唐耶、宋耶——唐詩を手本としているか、あるいは、宋

詩を手本としているかの意。唐詩と宋詩とは風格が異なる。

江戸時代の漢学者の間では、どちらの作風を主とするのが重要な問題となっていた。

2 東坡——北宋の文人・蘇軾(一〇三六—一一〇一)の号。

3 必ニ此詩ニ——このような詩でなければならぬとする。

4 党レ同伐レ異——同じ考えの者をひいきして、異なる考えの者を攻撃する。

5 忿争——怒って争う。

6 駭——愚かなさま。

7 白石・南郭——新井白石(一六五七—一七二五)と服部南郭(一六八三—一七五九)。ともに江戸時代中期の漢学者で、詩人としても評価されていた。

8 立意——主題を立てる。

9 生字——見なれない字や言葉。

10 吾子——あなた。

11 瓦——素焼きの器物。

問3 傍線部B「是雖狭見使然」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① 是雖_レ狭_レ見_レ使_レ然 是れ狭く然らしめらると雖も
- ② 是雖_レ狭_レ見_レ使_レ然 是れ狭見の然らしむと雖も
- ③ 是雖_レ狭_レ見_レ使_レ然 是れ狭しと雖も見て然らしむるは
- ④ 是雖_レ狭_レ見_レ使_レ然 是れ狭しと雖も然らしめらるるは
- ⑤ 是雖_レ狭_レ見_レ使_レ然 是れ狭見と雖も然らしむるは

問4 傍線部C「不_レ亦_レ已_レ駭_レ乎」の解釈として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① やはり愚かなことであろうか。
- ② どうして愚かだといえようか。
- ③ なんと愚かなことであろうか。
- ④ かえって愚かだといえようか。

問 5 傍線部 D「請_レ觀_ニ其_一詩」の解釈として最も適当なものを、次の ① ～ ④ のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

- ① 白石・南郭の詩を悪く言った者に、その人自身の詩を見せてくれるように求めた。
- ② 白石・南郭の詩を悪く言った者に、白石・南郭の詩を見せてくれるように求めた。
- ③ 白石・南郭の詩を悪く言った者に、その人自身の詩をよく見なおすように求めた。
- ④ 白石・南郭の詩を悪く言った者に、白石・南郭の詩をよく見なおすように求めた。

問 6 傍線部 E「余 因 謂 曰」以下の豊山の言葉について、その内容の説明として最も適当なものを、次の ① ～ ④ のうちから一つ選べ。解答番号は 36。

- ① 豊山は、ある人が白石・南郭の詩を偽詩と批判するのに同意した上で、詩の巧拙を「玉」「瓦」でたとえることによって、ある人の詩を真詩であると高く評価しており、相手の発言を重視してその詩作を承認している。
- ② 豊山は、ある人が白石・南郭の詩を偽詩と批判するのに対し、表面上は同意しつつも、詩の巧拙を「玉」「瓦」でたとえることによって、「二子」の詩を評価しており、相手の言葉を用いながら逆の結論へと導いている。
- ③ 豊山は、ある人が白石・南郭の詩を偽詩と批判するのに同意した上で、詩の巧拙を「玉」「瓦」でたとえることによって、「二子」の詩にも評価すべき点があるとして、相手の見解と自身の評価を調和させようとしている。
- ④ 豊山は、ある人が白石・南郭の詩を偽詩と批判するのに対し、詩の巧拙を「玉」「瓦」でたとえることによって、ある人の詩にも問題点があることを指摘するが、相手の立場を擁護し詩作が上達するよう励ましている。

問7 次の【資料】は本文と同じく豊山の文章である。本文と【資料】の両方から読み取れる、詩の評価に関する豊山の考えとして

最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 37。

【資料】

余^ハ於^レ詩^ニ無^レ所^ニ偏^好^{スル}。不^レ問^ニ其^ノ風^調^ハ之^ノ異^同^ヲ。佳^者^ハ取^レ之^ヲ。但^ダ生
硬[・]拙^俗^{ニシテ}諷^詠^多。無^レ韻^致^者^ハ。雖^モ曰^フ名^人^ノ所^ト作^ル。我^ハ則^チ不^レ取^ラ也。

(『松陰快談』による)

(注) 1 風調——詩風。

2 諷詠——詩を朗唱する。

3 韻致——気品や風情。

- ① 世の詩人たちは、徒党を組んで詩の上手下手を争っているが、重要なのは世間の人々の評判である。名声の高い人物の作品であっても、親しみやすさに欠けるものは評価に値しない。
- ② 世の詩人たちは、作風にこだわって党派争いをしているが、重要なのは詩としての完成度である。名声の高い人物の作品であっても、風趣に乏しく稚拙なものは評価に値しない。
- ③ 世の詩人たちは、徒党を組んで詩の上手下手を争っているが、重要なのは作風の獨創性である。名声の高い人物の作品であっても、独自の風格を持たないものは評価に値しない。
- ④ 世の詩人たちは、作風にこだわって党派争いをしているが、重要なのは表現の平易さである。名声の高い人物の作品であっても、奇をてらった作為の目立つものは評価に値しない。